第九条　曲前の事

底本：高知本　対校本：なし

【翻刻】

第九　曲前の事

曲のまへといふ事、此曲ハいかにもかろくうきやかに大きに云出し、曲の所を云やハらくるを曲の前と云也。のへていゝやハらけ呂に成を曲前とハいはす、只大きに云やハらける事也。此うたひにてよく〳〵知る儀にて候。御心をつけらるへし。嶋めくり「つゝめとも（大キニ）」「横川の水のすへかとよ大」。とうだいき「水の上のあわ（大）」「ゑひ花」。蟻通「たつ雲すきに大見れハ」。百万「なき跡の涙こす」「あらしの風大」。此外謡に「今ハせんひをくゆるれどもかいも」。江口に「さきの世のむくひまておもひやるこそ」同前也。

【校異】

対校本なし。

【現代語訳】

第九　曲前について

曲（ふし）のまえという意味は、この曲すなわち下がる節の部分において、節の始めをきわめて軽く浮き上げ伸びやかに謡い出し、下がった後の謡の運びを穏やかにさせることを曲の前というのである。音を長く伸ばして柔らかな声にすることを曲前というのではなく、単に伸びやかな声で謡の調子を穏やかにさせることである。次の謡でしっかり理解しておく必要がある。心構えされるべきである。

〈島廻〉の「つつめども」「横川の水の末かとよ」

〈灯台鬼〉の「水の上のあわ」「ゑひ花」

〈蟻通〉の「立つ雲透きに見れば」

〈百万〉の「亡き跡の涙越す」「嵐の風」

この他に〈鵜飼〉の「今は先非を悔ゆるれども。かひも」や〈江口〉の「前の世の報いまで思いやるこそ」も同様の扱いである。

【解説】

謡にみられる「曲」という言葉には、旋律、調子、節、さらに小段の「クセ」などの意味があり、多義的な用語として用いられる。本文では、まず曲に関する技巧的な謡い方を示し、曲の直前にみられる謡い方の注意点を教示する。曲前は、ただ時間的に音を伸ばすのではなく、軽く伸びやかに音高を浮き上がらせた扱いとし、直後の曲を謡い和らげるための技法であると説明する。曲とは下がる節を指し、曲前は音が下がる前に軽く浮かせる箇所と考

えられる。また曲前の箇所に「大」と記され、「大」の扱いは、息を込めて音を立体的に浮き上げることで、拍が大きく広がることを示したものと推測される。

具体例に挙げられた現行曲で確認すると、A上音から中音へ下がる曲前、B中音から下音に下がる曲前に二分される。

Aの曲前は、〈蟻通〉「立つ雲透きに見れば」の上音から上ウキを経て中音に下がる部分であり、中音に下がる直前の「透きに」の「に」にある「大」の箇所を指す。この「大」を軽く浮き上がらせ伸びやかに謡うことが曲前の扱いと考えられる。〈百万〉「嵐の風」は、前述する〈蟻通〉と同様の節付となる。

Bの曲前は、〈鵜飼〉「今は先非を悔ゆるれども。かひも」にある「かいも」の「も」の廻シ下ゲの直前と推測する。〈江口〉「前の世の報いまで思いやるこそ」では、「おも」の「も」にある中音から下音に下がる消廻シの箇所であり、〈百万〉「亡き跡の涙越す」は「涙」の「み」の呑ミ節が該当する。

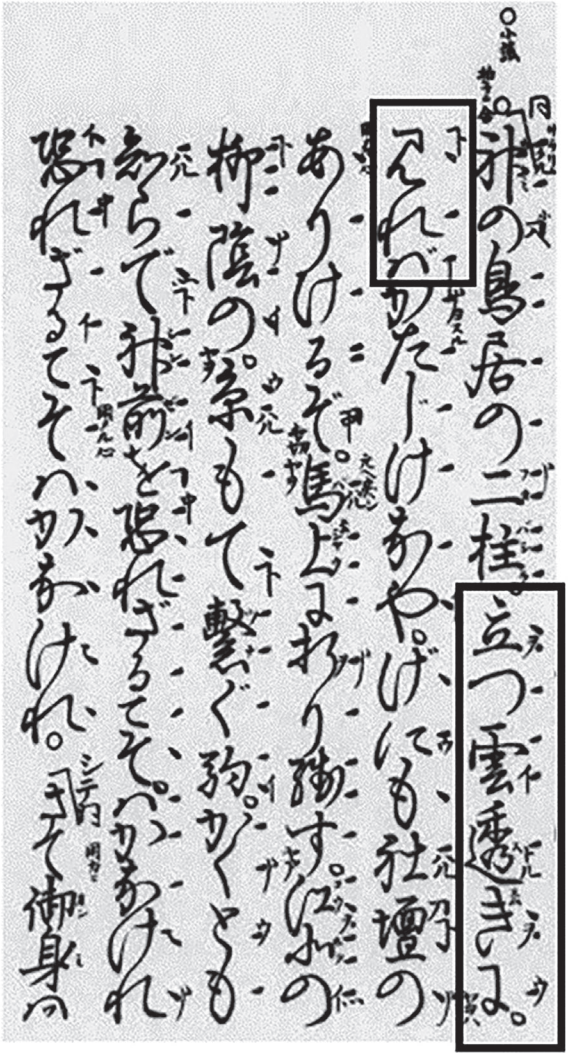
現代において曲前という用語はなく、Aの上音から上ウキとなり伸びやかに扱い、中音へ下げるような謡い方はあるが、Bにおいては、中音から中ウキとなり下音に下がる扱いは現在はみられない。

また曲前という言葉は、中世の『五音観世道見』を始めとする複数の謡伝書に散見する。曲前の謡い出しについて、『うたひ鏡』では「かろくうきやかに大きに云出し」と空間的に説明され、この謡い方は、『五音観世道見』や『音曲玉淵集』の記述と類似する。『謡秘伝鈔』は、「曲之前をは声を少つよくいひかけて」となり、前者と相違するが、謡どころとなる下げる節の調子を穏やかにするための調整的な技法として一致している。

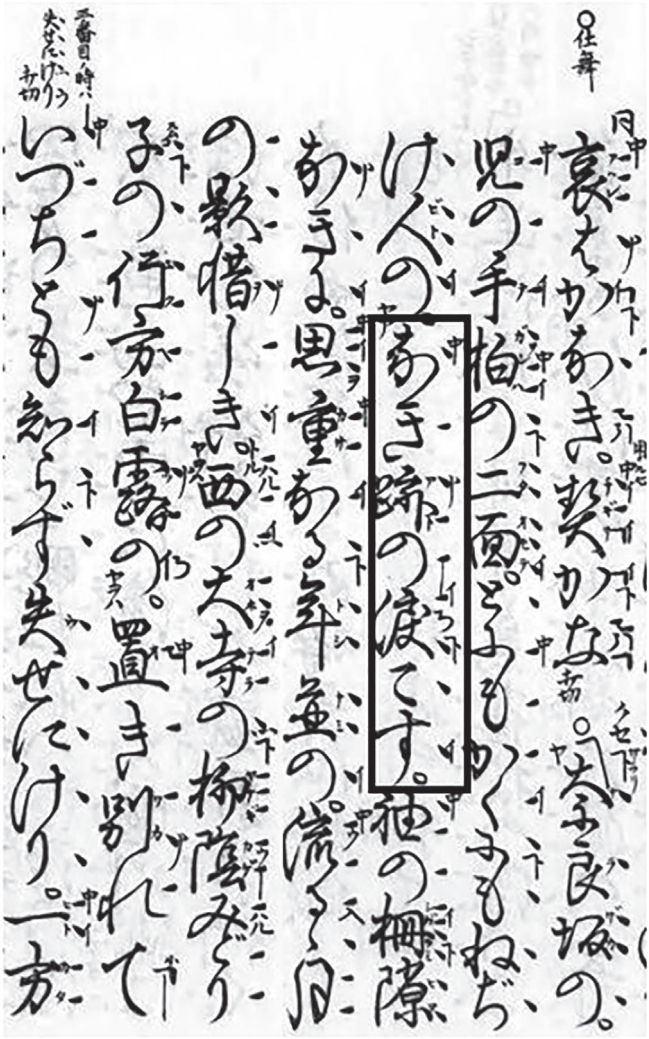
【参考】

①〈蟻通〉「立つ雲透きに見れば」（該当詞章を囲み線で加筆）

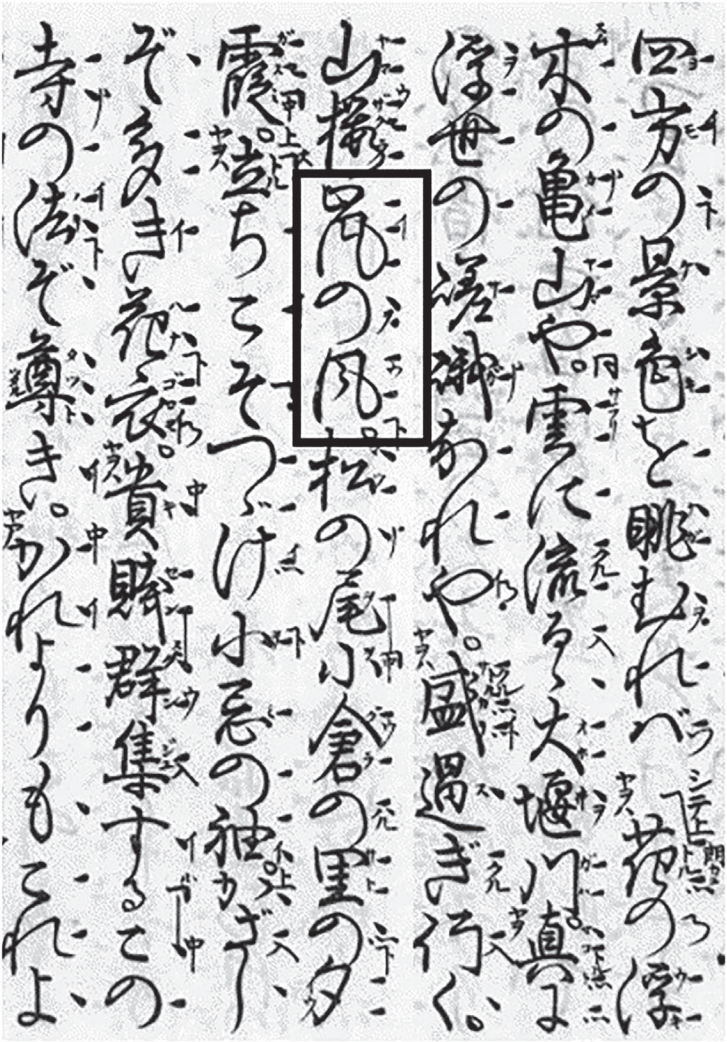
観世流大正改版謡本、観世元滋、檜大瓜堂、一九二〇年（個人蔵）



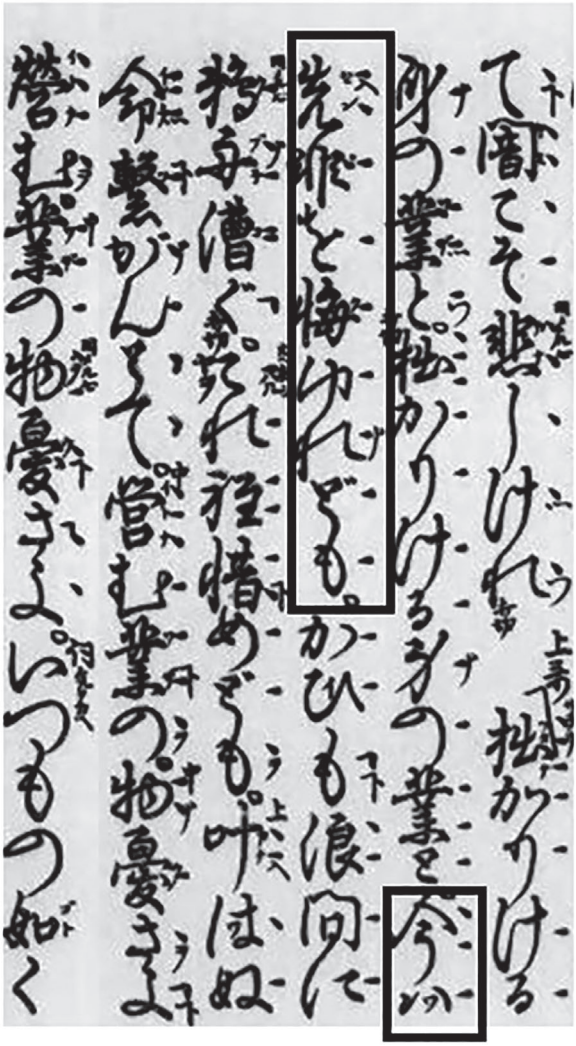
②〈百万〉「亡き跡の涙越す」
観世流大正改版謡本、観世元滋、檜大瓜堂、一九二〇年（個人蔵）



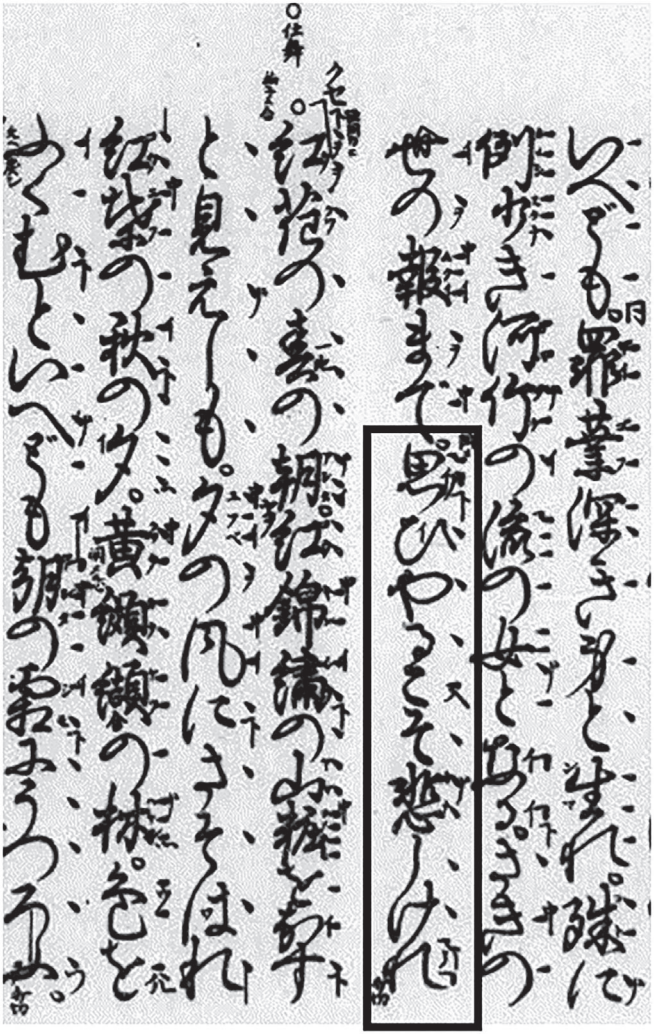
③〈百万〉「嵐の風」
観世流大正改版謡本、観世元滋、檜大瓜堂、一九二〇年（個人蔵）



④〈鵜飼〉「今は先非を悔ゆるれども。かひも」
観世流大正改版謡本、観世元滋、檜大瓜堂、一九二〇年（個人蔵）



⑤〈江口〉「前の世の報いまで思いやるこそ」
観世流大正改版謡本、観世元滋、檜大瓜堂、一九二〇年（個人蔵）



⑥『謡秘伝鈔』

一　曲之前をは声を少つよくいひかけて、曲をやはらかにやわらけ可謡也。曲面白聞ゆる也。

（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編『花鏡　謡秘伝鈔―演劇資料選書1』1975：342）

⑦『音曲玉淵集』四巻

一　曲の前といふ事

いかにも前を軽く浮やかに大きに云出し曲を云和らくるを曲の前といふ延て云和らけ呂に成を曲の前とはいはす

（臨川書店復刻本 1975：298）

（坂東 愛子）